

チョットしたお金の話

『chore (チャア)』という英単語には、じっくりくる日本語がないようです」

数年前、金融教育関連の講演をお願いした、長く日本に在住する米国人の先生から移動の車中で教えていただいた。

米国では、お小遣いは家事や家業を手伝ってはじめてもらえるものであり、また、年長になると、やや詳細にやるべき仕事や期限が定められ、守らなければお小遣いを得られないという、家庭でのしつけのことらしい。「お駄賃を得られる家での雑役」とでも翻訳すべきか。

お話を伺いながら、ジョブディスクリプション(職務記述書)に基づく米国での働き方(ジョブ型の賃金体系)は、家庭教育にも根付いているのだなと感心した記憶がある。

「今年から中学生だから、お年玉は5000円ね」。日本では、お年玉やお小遣いは、養育する親が「与えるもの」で、年齢や立場に応じて金額を決める傾向があるようだ。筆者も、干支にちなんだうさぎや、かわいいキャラクターをあしらった「ポチ袋」を見ると、同じ考えが頭をよぎる。日本では、「年功・職能給的な賃金体系」に見合った家庭教育が行われてきたということだろう。

お金のあり方にも時代の変化が訪れている。「お年玉もスマホ決済です」。中国の有力企業の日本支店長がスマホ画面をスクロールしながら、教えてくれた。便利な送金アプリがいち早く広範に普及したスウェーデン在住の方は、「現金を受け取ると、銀行でも現金取り扱い不可の店が多くて困る」と話していた。

日本でも、キャッシュレス決済、税金などの電子納付を推進しているが、現金を主体にした金融サービスが行き届いている日本と諸外国では事情がだいぶ異なるようだ。キャッシュレスが進展した国では、むしろ現金を利用できる環境をどう確保するか、という検討や体制の整備が進んでいるという。

お金の世界でデジタルの活用が進んでも、紙や金属の現金と同様に、価値の尺度、保存機能、決済手段としての役割を備え、誰もがどこでも安心して使えるお金であるべきことには変わらない。

日本銀行では、「中央銀行デジタル通貨」の概念実証を一昨年の春から順次進めている。デジタル通貨として誰もが使えるよう、①ユニバーサルアクセス(各ユーザーのスマホに専用アプリをインストールするなど)、②十分な安全性(サイバーセキュリティや情報セキュリティについて、十分な対応を講じる)、③いつ、どこでも使えるものであるための強靱性きょうじん(システム障害への耐性などを含めた可用性を高める取り組み。通信障害や電力途絶といったオフライン環境下でも利用できる仕組みなどの工夫)、④決済の支払完了性や即時決済性、⑤民間決済システムとの相互運用性の確保—などが求められ、論点は多岐にわたる。

新年を迎え、お金が多く流通する時期に、変革する社会における近未来のお金の稼ぎ方、使い方に思いを巡らせてみた。